



朝のこない夜はない


脳みそを柔らかくして  
新しいものを吸収しましょう。

副山首 鈴木正修

「居着くは死ぬる手なり、居着かざるは生る手なり」。宮本武蔵の『五輪書』にある言葉です。

「居着く」とは安定するという意味で、安定したら勝負では負け。仕事や人生でも「これでいい」と思ったら、その人の成長、進歩はそこで終わり。だから現状に満足せず、生涯修養の心構えが大事だということです。

中国の古いことわざで『株を守る』というのがあります。うさぎが木の切り株



にぶつかって死んだのを見た男が、もう一度うさぎが来てぶつからないかと、仕事を抛って切り株を見守っていたため、国中の笑い者になったという話です。古い慣習や考えに固執して時勢に合わなくなり、世の中の進歩や変化に取り残される様を言った話ですが、あまり笑えない話かもしれません。私たちは、武蔵の言葉を知っていても、案外『株を守る』ようなことをしているものです。


日本将棋連盟会長の米長邦雄さんは、平成五年に五十歳で名人位を獲得し、史上最年長名人と言われた方です。米長さんは、武蔵の言葉を座右の銘として名人になったと言っても過言ではないと思います。

時代は少し溯ります。

あのバブル景気の真只中の頃、米長さんは本業の将棋で朝から晩まで一生懸命やっけて得る収入の何十倍の収入を、株の売買で得ていたそうです。

この時に、このままでは自分がおかしくなってしまう。いつか不幸な出来事が起こるのではないかと、株をやめたそうです。

そのやめ方が面白いのですが、なけなしのお金で土地を買って家を建て、頭金



を払って残りをローンにし、株に使う余剰資金がないようにしたのです。これが名人の第一歩となるのですから、人生はまた面白いです。ちょうど家のローンを払い終えた平成元年頃、隣りの人が亡くなって、米長さんは相続人から古い一戸建てをまたローンで買い、そこを若手プロの将棋道場にしたのです。しかし、道場主であるはずの米長さんが若手によく負けたといえます。居着いていたのです。以下、米長さんの言葉です。

「年齢を重ねると、どうしても脳みそが堅くなり、新しいものを吸収する意欲が減退して進歩がなくなる。これが正しいという自分の信念が積み重なってきて、脳の中を駐車場にたとえれば、満車状態になっている。そのまま同じものが入っていたのでは、年々古くなるばかりだから、新車と取り替えていく必要がある。

しかし、古くてもいいものはあるので、どれを取り替えるかについては、自分の判断だけではいけないと思います、若い人に教わることにした。

優秀な若い人たちに、いろいろな局面の図面を見せ、意見を聞いた。私と彼らが同じ感覚、読み筋であれば、その局面は新車と同じで合格である。



## 朝のこない夜はない (203)

困るのは、三、四人の若い人が同じ見方で、私の見方がまったく違うという時だが、それは自分の脳みそがサビついているのだと考え、いろいろな局面の見方を用意しておいて、繰り返し繰り返し研究しているうちに、ある局面を見た時、  
自分はどうするが、彼らならこうするな」という判断が次第にできるようになってきた。

それを実践でやるわけだが、自分ではこの方がよいと考えた手を、捨てられるかどうか勝負である。捨てられるということは、脳みそが柔らかいことになる。若手の為と思つて作つた道場がかえつて若手に教えられ、居着いていた自分を若返らせる場所となり、米長さんは名人となったのです。

米長さんは勝利の女神に好かれる三つの条件として「笑い」「精神の若さ」「謙虚さ」を挙げておられます。

この三つは人生全般において幸運を導く秘訣だと思えます。